連　載　　第16回

21世紀の生のための キーワード

――新しい批評のことば――

鈴木英明
Suzuki Hideaki

個　人

■「わたし的」と「個人的」

ここ十年くらいだろうか、「わたし的」（「ぼく的」、「おれ的」等々）という言い方がよく使われるようになっている。従来は、上記のような一人称に「的」をつけた言い方ではなく、「個人的」という言葉が一般的であったように思う。「個人」という言葉について考えるにあたって、「わたし的」と「個人的」という言葉から受けるニュアンスの違いを手がかりとしてみよう。

だがまずおさえておくべきは、「個人」は **individual** の翻訳語であり、この **individual** はもともと「分割できない」（**indivisible**）を意味し、他の複数の **individuals** との（分離できない）つながりを表す言葉だということである（**Williams 161**）。言いかえれば、「個人」は元来、それが属する何らかの社会的

集団の存在を前提とする言葉なのだ。合理主義的な「偽りの個人主義」に対して、人間理性の限界を認め伝統と慣習を重んじる「真の個人主義」を説くハイエクでさえ、真の個人主義は社会についての理論であり、「人間の社会生活を規定する諸力を理解しようとする試みである」と述べている（**Hayek 6**）。

したがって、たとえば「個人的には増税に反対です」という言明は、増税に賛成ないしは反対する社会の意見（世論）との明確な対比を含意している。これに対して、「わたし的には増税に反対です」という言明は、社会との対比があいまいな私的領域で発せられた意見であるように感じられないだろうか。そもそも増税という公的な問題と「わたし的」という言葉とはそりが合わない。「わたし的」という言葉は、たとえば「**AKB48** ファン」という趣味の共同体において、「わたし的には前田よりも板野が好き」と言う場合のように、私的領域での好みの微細な（いや、ファンにとっては絶対的な）違いを述べるときにこそふさわしい。ようするに、図と地（背景）のアナロジーで言えば、「個人的」という言葉は公的領域を地としてはじめて明確に浮き上がってくる図であるのに対して、「わたし的」という言葉によって立ち上がる親密な世界は、公的領域を地とすることなくぼんやりと存在しうる。言いかえれば、「わたし的」世界は、公的領域との境界線がぼかされてあいまいになることによって、それ自体が（図を兼ねた）地となっているのである。

ジグムント・バウマンがウルリッヒ・ベックを引きつつ述べる、後期近代における「社会の個人化」とは、上記の日本の文脈においては「社会のわたし化」と言うべきだろう。「わたし化」された社会では、私たちの大部分は、社会システムの諸矛盾を個々の人生において解決することを強いられる。就職活動がうまくいかないとすれば、それはグローバル資本主義の矛盾のせいでも政府の雇用政策の失敗のせいでもない。「わたし」が採用面接を乗り切るスキルやコミュニケーション能力を磨かなかったせいか、あるいは就職しようという「わたし」の意欲が足りなかったせいであるとされるのだ。

こうした自己責任論は、言うまでもなく新自由主義の主たる原理のひとつである。ここにおいては、「わたし」の問題を「わたしたち」の社会問題として捉える契機は失われている。それどころか、千田有紀が指摘するように、こうした傾向に抗って「わたしたち」の問題を公的領域で論じようとする人びとは、その胸のうちに私的な動機（利益）を隠し持っているとすら見られてしまう（千田 **181** 頁）。たとえば、ベーシックインカムの実現をめざすアクティヴィストは、まず何よりも自分が働かずに食べていけるようにしたいのだろう、というように。社会（公的領域）を地として存在する図としての「個人的」個人同士とは異なり、「わたし的」個人同士には、お互いを結びつける触媒としての場が欠けているのである。

■翻訳語である「個人」

社会が存在しないから（「わたし的」ではない）個人が存在しないのか、それともこうした個人が存在しないから社会が存在しないのか、その順序はともかく、相互に規定し合う「社会」と「個人」は、どちらも元来日本語には存在しなかった言葉・概念であり、幕末から明治時代にかけて西洋から取り入れられたものである。ここで、特に **individual** という語の翻訳を通じて日本の現実を変えようとした福澤諭吉の努力を、柳父章の所論に依りながら振り返っておこう。

individual という言葉は、ヨーロッパの歴史のなかで「神に対してひとりでいる人間、また、社会に対して、窮極的な単位としてひとりでいる人間、というような思想とともに」使われてきた（柳父 **33** 頁）。こうした思想的背景を感得した明治初期の翻訳者たちは、普通の日本語では **individual** の原義は伝わらないと考え、「一箇人民」や「一身ノ身持」などといういかめしい訳語を当てたのである。

これに対して、翻訳において「力（つとめ）て難解の文字を避て平易を主とする」（福澤 **412** 頁）福澤諭吉は多くの場合、**individual** を「人」という易しい日本語に訳している。誰にでも理解できる「人」という訳語を用いると、**individual** が含意する西洋の思想的文脈は読者に伝わらないかもしれない。しかし福澤は、**individual** をあえて普通の日本語である「人」と訳し、その翻訳文のなかで従来の日本語にはなかった文脈を造りだすことによって「人」という日本語自体の意味を変えようとした、柳父はそう指摘する（柳父 **33–34** 頁）。たとえば、フランシス・ウェーランドの『道徳論』の翻訳とみられる部分を多く含む「一身の自由を論ず」という文章で、福澤は、**God** の訳語である「天」に対して責を負いひとりでいる「人」という考え方を語り、『学問のすすめ』の有名な冒頭にある「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という文句と同様に、「人」という言葉にこれまでになかった新しい意味を与え、これによって日本の現実そのものを変えようとしたのである（同上 **34–37** 頁）。

しかし、**individual** の背景にある思想と日本の現実との隔たりはあまりに大きく、福澤は「人」という訳語によって日本に **individual** の生成を促すことを諦め、自身がかつて揶揄した「四角張った文字」（福澤 **418** 頁）である「独一個人」という言葉を **individual** の訳語として用いるようになってしまう。福澤のこうした「挫折」の後、中江兆民の仏学塾で **1891**（明治 **24**）年に出された『仏和辞林』の改訂版において、**individualisme** の項目に「個人主義」という訳語が加えられ、この頃から「個人」という言葉が広く使われるようになったという（同上 **41–42** 頁）。「個人」という言葉は、日本の現実において実質的な指示対象をもたないまま、一種の「理念」として流通し始めたのである。

■「非政治的な個人主義」

興味深いことに、「個人」という翻訳語が一般化してくる明治 **20** 年代、とりわけ日清戦争（明治 **27** 年）の後は、明治時代の政治思想の二大潮流であり互いに内的関連性をもっていた国権論と民権論とが乖離し始める時期でもある。丸山眞男は「明治国家の思想」において、このあたりの事情を鋭利に分析している。丸山によれば、明治維新の精神的な背景である尊王攘夷論と公議輿論思潮それぞれの発展形態である国権論と民権論とは、同時的に存在し相互に規定し合う関係にあった。不平等条約の改正などによる日本の対外的な独立（国権論）のためには、広く国民の上に政治力を基礎づけていくこと、つまり国の内部における個人の解放（民権論）が必要であり、この二つの課題の内的関連性をもっとも鮮やかに定式化したのが福澤諭吉であった（丸山 **61–62** 頁）。ここにおいて「個人」は、めざされるべき理念にすぎないとしても、政治主体としての役割と不可分だったのである。

ところが日清戦争における勝利を契機として、多くの民権論者が、民権論と必ずしも内的関連性をもたないような「上から

の」国権論者、つまり帝国主義者に転向していく（同上 **75**）。ここで注目すべきは、上記のような一般情勢の推移を示す例として、明治 **20** 年代に三宅雪嶺らが唱えた日本主義と、日清戦争直後に起こった明治 **30** 年代の高山樗牛らの日本主義との違いを丸山が重視していることである。**20** 年代の日本主義は「下から」の性格が強く、労働者に対する共感が示されるなど、日本社会の歪んだ発展を是正しようという理想主義的傾向をもっていた。これに対して **30** 年代の日本主義は、天皇を絶対主権者として神格化し、国内的にも国際的にも弱肉強食を説くなど、「上から」の国家主義を前面に出してきた。そして、こうした日本主義を唱えた樗牛は、他方で明治 **34** 年に「美的生活を論ず」を発表し、個人における感覚的な快楽の解放を、すなわち本能的な個人主義を説き、その文名を上げたのである。

日清戦争後の「国民的自覚」の高まりのなかで、上からの国権論あるいは帝国主義と平行して、「近代的な個人主義と異った、非政治的な個人主義、政治的なものから逃避する、或は国家的なものから逃避する個人主義」が瀰漫していった（同上 **79**）。これが意味したのは、個人の独立の上に国家の独立があるというような、相互規定的な関係にあった民権論と国権論が乖離し、帝国主義化した国権論が民権論を吸収していったということだけではない。民権論の考え方を受け継いだ社会主義運動が当時はまだ「未熟」であったことから、国民を下から把握する「国民思想」がなくなってしまったということをも意味していたのである。

> したがって国民思想は一方には個人的内面性に媒介されないところの国家主義と、他方には全く非政治的な、つまり星や菫花を詠い、感覚的本能的生活の解放に向うところの個人主義という二者に分裂して相互が無媒介に併存する様になるのであります。（丸山 **81** 頁）

日本の土壌に足場をもてない「個人的・近代的」個人（**individual**）は抽象的な理念として虚空を漂い、国家と非政治的で没主体的な「わたし的」個人とが湿った国土に分裂しつつ共棲しているこうした光景は、現代日本に生きる私たちにとってはうんざりするほど見慣れたものではないだろうか。

■政治と文学

上記のような光景が焦土と化した敗戦後の **1947**（昭和 **22**）年、「政治の季節」のただなかで発表された「一匹と九十九匹と」というエッセイで、福田恆存は、政治と文学との、社会と個人との分離を説きつつ、丸山眞男とは異なった方向から、すなわち文学の側から「個人的」個人の確立をめざしていたように思える。[1]

福田は、『新約聖書』の「ルカ伝」におけるイエスの言葉に拠りながら、政治によって九十九匹の羊を救えても、そこには「失せたる一匹」が存在すると言う。そして、政治には救うことのできないこの一匹にかかわるのが文学であり、「みづからがその一匹であり、みづからのうちにその一匹を所有するもののみが、文学者の名にあたひする」と語る（福田 **335–36** 頁）。一見すると、福田の言う「文学者」は丸山の言う「全く非政治

[1] 丸山の「明治国家の思想」の基になった講演も、敗戦直後（**1946** 年）に行われている。

的な」、「星や菫花」を詠う個人であるように思えるかもしれない。しかし福田は、「政治と文化との一致、社会と個人との融合といふことがぼくたちの理想」であり、「ぼくは両者の完全な一致を夢見るがゆゑに、その截然たる区別を主張する。乖離でもなく、相互否定でもない」と述べている（同上 **334** 頁）。福田が否定するのは、人間のうちに潜むエゴイズムから目を背ける、「個人的内面性に媒介されないところの」（丸山 **81** 頁）空疎な主義主張であり、そうした主義主張に全面的に身をゆだねてしまう「個人」である。そうした「個人」は、公的領域との対比なしにぼんやりと存在する「わたし的」個人の裏面なのだ。

そうすると、冒頭で述べたように、公的領域との境界がぼかされてあいまいになった「わたし的」世界が現在支配的であるならば、社会と不可分の（個人的・近代的）「個人」（**individual**）という言葉は、一般的な傾向として、先人の努力にもかかわらず、明治時代以来ついに日本の土壌に根付くことはなかったということだろうか。だとすれば、日本において「ポスト近代（モダン）」とは、個人や社会についていったい何を意味しているのだろうか。

■「明日の考察」

先述した高山樗牛の本能的個人主義を批判する石川啄木は、**1910**（明治 **43**）年に「時代閉塞の現状」を示す一例について次のように述べている。

> 今日我々の父兄は、大体において一般学生の気風が着実になったと言って喜んでいる。しかもその着実とは単に今日の学生のすべてがその在学時代から奉職口の心配をしなければならなくなったという事ではないか。そうしてそう着実になっているに拘（かかわ）らず、毎年何百という官私大学卒業生が、その半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしているではないか。しかも彼等はまだまだ幸福な方である。前にも言った如く、彼等に何十倍、何百倍する多数の青年は、その教育を享（う）ける権利を中途半端で奪われてしまうではないか。（**116–17** 頁）

こうした「現状」は、多くの若者が派遣社員やフリーターとして「明日」の見えない生活を続けざるをえない「今日」の現状と多くの点で重なって見える。啄木は、自然主義における自己主張的（個人主義的）傾向も自己否定的（決定論的）傾向も、「既成強権」すなわち国家と対峙するものではなかったと述べ、また、「哲学的虚無主義」や「元禄時代に対する回顧」も、「強権」に服従した結果にすぎないとしている。そして、こうした「現状」を打破するために、自然主義を捨てて「全精神を明日の考察――我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬ」と訴える（**118** 頁）。こうした「明日の考察」こそが、啄木が「文学に求むるところ」である「批評」なのだ（**121** 頁）。ここには、政治と文学の「完全な一致を夢見るがゆゑに、その截然たる区別を主張する」福田恆存が醸し出す余裕はない。そうした「一致」を夢見ている余裕は啄木にはない。政治は公的なもので文学は個人的なものである、そういう思い込みは余裕のある人びとのものだ。「一切の空想を峻拒して、そこに残る唯一つの真実――「必要」！」（**120–21** 頁）に迫られている人びとは、政治（公的）と文学（個人的）との既存の境界線をこそ問題にするだろう。政治（公的）と文学（個人的）をめぐる公認された境界線を自明視しないこと。公共の場である街

路、富の循環を支える街路を、（諸）個人が主張を行う舞台とし、みずからの身体をもって公／私の境界線を問いなおすこと。こうした活動は、私たちの「明日の考察」にかかわる政治・文学の一部なのである。

〈参考文献〉

石川啄木「時代閉塞の現状（強権、純粋自然主義の最後および明日の考察）」『時代閉塞の現状 食うべき詩 他十篇』、岩波書店、**1978** 年、**107–21** 頁。

千田有紀「新自由主義の文法」『思想』**No. 1033**、岩波書店、**2010** 年、**172–91** 頁。

ジグムント・バウマン『個人化社会』、澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳、青弓社、**2008** 年。

福澤諭吉『福澤諭吉著作集 第 **12** 巻 福翁自伝 福澤全集緒言』、松崎欣一編、慶應義塾大学出版会、**2003** 年。

福田恆存「一匹と九十九匹と」『福田恆存評論集 第 **1** 巻 一匹と九十九匹と』、麗澤大學出版會、**2009** 年、**316–36** 頁。

丸山眞男「明治国家の思想」『丸山眞男集 第四巻 一九四九－一九五〇』、岩波書店、**1995** 年、**51–96** 頁。

柳父章『翻訳語成立事情』、岩波書店、**1982** 年。

Friedrich A. Hayek. "Individualism: True and False." 1945. *Individualism and Economic Order*. London: Routledge, 1949. 1–32.（ハイエク「真の個人主義と偽りの個人主義」『ハイエク全集 第 **3** 巻』、嘉治元郎・嘉治佐代訳、春秋社、**1990** 年、**5–46** 頁）

Raymond Williams. *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. 1976. Rev. ed. New York: Oxford UP, 1985.（『完訳 キーワード辞典』椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳、平凡社、**2002** 年）

（日本女子大学学術研究員）